

一話 題一

日本医科大学雑誌と展望

中央電子顕微鏡研究施設 相原 薫*

本学在勤 36 年をへて、本年 3 月に退職することになったので本誌「話題」執筆としては現職として最後になる。19 年にわたった編集委員の経験と所感を述べてみたい。19 年であるので在職の半分は本誌編集と何らかの係わり合いがあったわけである。思いつくままに変化を列挙してみる。過去において金子 仁教授、横室公三名誉教授、さらに荒木 勤教授と編集主幹が引きつがれ、今日の発展をみるにいたっている。その間には多くの変遷があったと理解している。

1. Dr. Victor Ferrans からの手紙

金子 仁教授が編集主幹のとき表紙が白紙から青色と黄色の現行の装幀にかわり、スマートになり、これが付属病院の受診券にも取り入れられ広く利用されるようになった。Key word 欄も創設されたように記憶している。日医大誌の Index Medicus に収録される可能性がないかという討論もあった。たまたま川並汪一先生（現老人病研究所長・教授）が NIH に留学されておられたので川並先生を通して Dr. Victor Ferrans (Chief, Section of Pathology, National Heart Lung and Blood Institute, NIH) に交渉をお願いしたところ、National Library of Medicine からほどなく収録決定の通知がきた。日本医科大学学報第 100 号をみるとそのときの編集委員会の内容がよく記録されており、Index Medicus に収録されたのだからそれにふさわしい内容にしようと述べられている。筆者は現在関係する学会誌の雑誌委員をしているので、その評価を高めるために Index Medicus の収録を希望している。しかし、その選考が大変で一回審査に洩れると 2 年、充電期をおかなければならないという実情にある。伝統ある本邦の医科大学誌にも収録の希望が続出している。しかし、仲々収録されないのが現状である。Dr. Victor Ferrans、さらには National Library of Medicine の好意を無にしないようさらなる御盡力を期待したい。

2. 交換雑誌について

国際的に医学、情報の交換が不可欠になっており交換誌制度はもっとも経費的に安い。あるいはまた相互の医学情報を得られやすい方法であり、この方法を広く採用したことにより幅広い医学情報を得ることができ、また他国の医科系施設図書館で本誌を見つけると「ほっと」することがしばしばであった。

3. Impact Factor, Citation Index の導入とその対応

雑誌が学術研究に貢献する factor を Impact Factor という。引用頻度を Citation Index というがそれも評価の Scoring として定着した。Guideline score があるわけではなく、医学界における米国系の Scoring の方法については問題がないわけでない。また、Citation Index についても作務的な Citation が行われることも少なくなく、これらの点を考えると完全ではない。しかし、厳然とした Index Factor があることを考えると、できるだけこれらの Needs に対応する

ような方策をとる必要があろう。

4. 学会誌の外部委託方式による quality の上昇について

学会誌も Oxford University Press, Springer Verlag などの外国の編集機関を活用することにより、その level 向上をみるが多くなってきた。紙質、印刷、写真の向上がみられ、また外国からの投稿も増加しつつある。日医大誌がこのような Module を踏襲した方がよいのか速断は許されないが、日本の医大誌などにも早晚この方式を実行する場合もありうることも念願におく必要があろう。この場合、発行コストの上昇も考えられので検討が望まれよう。英文誌を発行することは本編集委員会の長い間の検討課題であったが、今なおもっての懸案である。21 世紀への躍動を感じる昨今この問題についても前向きな対応が期待される。

5. 情報化時代における知的所有権の確保のあり方、

現在は情報化の時代といえる。Floppy disc による原稿の保管、パソコンによる原稿の整理、Internet による文献検索等現代の情報ツールを駆使した原稿が送付されてくる時代となった。きわめて高い情報がえられる知的所有権の保持がきわめて困難になっている。原稿を送付するまでに clear しなければならない。人間、動物倫理委員会、遺伝子治療、臓器移植等の先端医療技術を駆使した研究においては学内委員会はもとより、National Council またはその類似団体 (Analogous Bodies) の clearance を得る必要があり、共著においては連名者の了承、出版社の許可を得る必要があり、あまりにも権利、義務関係が交錯しすぎている。筆者もにが経験があり、写真を引用したところ First Author の許可を得て安心していただけるところ、共著者から許可を得ていないと抗議がきて、謝罪したことがある。執筆案内にこれらの点を明確にして頂きたい。Flowchart でも考案していただき、執筆者の便を図って頂ければどうかと考えている。

6. 本誌の独自性の創造について

本誌は有能かつ指導性ある編集主幹と編集委員の努力で今日にいたり立派な学術誌として育成してきた。しかし、学術誌の将来には幾多の困難がまちはうけていることも否定できない。筆者の関係する国際交流センターの主催する留学生研究発表会抄録を本誌に収録することを御快諾いただき感謝申し上げる。本学の活動も多方面にわたっており、医学部学生の自主学習の成果や課外活動記録等の収録も本誌の内容に多面的な視点を与えているように思われる。また、大学院特別講義の収録もさらにこの向上のために貢献するものとなると考えられる。

研究には Research in Depth と Horizontal Research in Spiral Form (Paik, H.Y) があり、従来は前者を基本としてきたが、今後は社会活動も反映した後者の比重も考えてゆくべきだと考える。このように考えると前者の型をとる学会専門誌の意義は従来にも増して重要となり、後者の型を取り入れる医大誌の存在価値も増加することはあっても減少することはないと考える。

謝辞： 擲筆するにあたり長期間編集委員として本誌の編集に参画させて頂いた日本医科大学医学会、歴代編集主幹ならびに現編集主幹荒木 勤教授に深謝する。

(受付: 1999 年 1 月 12 日)

(受理: 1999 年 2 月 3 日)

*前教授